

L 国 語 問 題

注 意

- 一 試験開始の指示があるまでこの問題冊子を開いてはいけません。
- 二 解答用紙はすべて黒鉛筆または黒のシャープペンシルで記入することになっています。
黒鉛筆・消しゴムを忘れた人は監督に申し出てください。
(万年筆・ボールペン・サインペンなどを使用してはいけません。)
- 三 この問題冊子は20ページまでとなっています。試験開始後、ただちにページ数を確認してください。
なお、問題番号は一～三となっています。
- 四 解答用紙にはすでに受験番号が記入されていますので、出席票の受験番号が、あなたの受験票の番号であるかどうかを確認し、出席票の氏名欄に氏名のみを記入してください。なお、出席票は切り離さないでください。
- 五 解答は解答用紙の指定された解答欄に記入し、その他の部分には何も書いてはいけません。
- 六 解答用紙を折り曲げたり、破ったり、傷ついたりしないように注意してください。
- 七 この問題冊子は持ち帰ってください。

マーク・センス法についての注意

マーク・センス法とは、鉛筆でマークした部分を機械が直接よみとって採点する方法です。

- 一 マークは、左記の記入例のように黒鉛筆で枠の中をぬり残さず濃くぬりつぶしてください。
- 二 一つのマーク欄には一つしかマークしてはいけません。
- 三 訂正する場合は消しゴムでよく消し、消しきらずはきれいに取り除いてください。

マーク例

①	
○	1
○	2
●	3
○	4
○	5

(3と解答する場合)

一 左の文章を読んで後の設問に答えよ。(解答はすべて解答用紙に書くこと)

よくいわれることですが、坂口安吾のロマン^(注1)には成功したものが無いということになっています。ここで小説とはどういうものであるかをいわなければ、それが成功したも失敗したもないのですが、いわゆる近代小説ということなら、すでに答⁽¹⁾のヒントは出ているようです。

小説がなぜ小説になりそこねるのか、イカロスからライト兄弟までの飛行家たちはなぜツイラク⁽⁴⁾したのか。空を飛ぶためには流体力学の法則に従わなければならないように、小説がことばの集まりとして、持続するエネルギーをになうためには、ある力学法則に従わなければならない。つまりはことばをどう使うかという問題ですが、そういっただけでは散文一般のことになり、問題⁽¹⁾を小説に即して考えるには、そこで「他者」という変数を手がかりにするのが有益かと思われま⁽¹⁾す。

ことばを使うということ自体が「他者」にかかわる行為なのですが、公衆のまえでしゃべったり、手紙を書いたりする場合の他者ははっきりしていて、この他者との関係も単純であるだけに、ときによつてはほとんど他者の存在を忘れてことばを使うこともできます。だが日記を書くあたりから他者との関係は微妙なものになってきます。日記のなかでひとにはいえないことを告白しようとするとき、書き手のまえに奇怪な影があらわれ、するとことばはこの他者に向かって動き、かれの力に対抗しながらひとつのことばによる空間をつくってしまう——いや、これはすでに小説の話にはいつています。そして書き手がこのような自我剥離的な他者をみいだすかどうか問題であつて、普通のひとは日記を書きながらこんな奇怪な状態には陥らないでしょう。だが他者をみいだすことのできた人間なら、ここで、実際にはなかったが可能なことを、つまり嘘を書くことによつて、他者を極とするこの空間をちよつと歪^{ゆが}めてみようという誘惑に身をまかせるのはごく自然のなりゆきです。あとはこのことばの空間にどのような形をあたえるかということがすべてとなります。この作業はそれ自体がひとつの探求であつて、ここにはさまざまな発見がありうるので、それに応じて作者の名前つきの小説が存在することになり

ます。そこで坂口安吾の小説というものがあれば、それが十九世紀のどれかの小説と同じパターンに属さないから小説になっていないなどということはもちろんできなくて、問題は右のような操作で小説空間がつくられているかどうかということにかかっています。つくられているならば⁽²⁾読者はあの他者が占めていた位置をあたえられて、たしかにひとつの空間の存在を感じることができでしょう。そして読者はこの空間のなかで生きて、たしかにべつの時間が流れることを知ります。

安吾の小説はしばしばこのような構造を欠いているようにみうけられます。勿論^{もちろん}安吾が他者一般あるいは読者を意識しなかったはずはないので、それはかれがみずから戯作者と規定しようとしたことなどをみてわかりますが、しかし他者がいてそのまゝで^(注2)講談を——安吾は講談を好んだそうです——語っても、そしてそれが同時に「自己表現」であつたとしても、それだけでは小説の空間を形成しないのです。小説は、さまざまな声色でおもしろおかしく語られる自己表現というような単純素朴なものではなく、小説家とは、おそらく、あの「他者」に^(あ)みいられてこれを攻略するためにことばを使い、しかもそれが同時に新しい小説の方法の探求にほかならないような、ことばの技師でなくてはなりません。この種の人間に必要な情熱は、あるいはきわめて病的なものかもしれません。⁽³⁾安吾は小説家であるにはあまりに健康すぎたのかもしれない。かれは「教祖の文学」でもいつているように、まず人間として生きることが欲したのであり、かれが憑かれていた生きるといふ観念を追求することと、小説を書くという行動とは、不幸にして一致しなかったともみられます。

カフカのように書くことと生きることがひとつである人間や、^(注3)ヘンリー・ミラーのように、書くことが生きることの一部をなしていて、よく生きることがよく書くこととが正比例の関係にある人間もいて、かれらはまことに幸福な文学者ですが、ここに、書くことと生きることがべつのことで、書いているときは生きていないような人間がいたとすれば、かれにとつては自己表現ということさえ余分の行為となるでしょう。いいたいことはあるがことばを使うのに時間をついやすこと自体が耐えがたい。

魔術はないものか——このいらだちは、ことばを表現の手段とししか信じられなくなった人間のもんです。このようないらだちと、ことばの酷使が安吾の

晩年の作品にはみられるようです。

戦前の「吹雪物語」は安吾の失敗したロマンとして引きあいに出されます。しかしわたしは安吾の小説のなかでこれを好きなもののひとつに数えたいと思います。

通説によると安吾は矢田津世子(注4)との失敗した恋愛から立ちなおるために「吹雪物語」の執筆に没頭したといわれています。これがほんとうだとして、またその小説がいわゆる近代的リアリズム小説をめざしていたとすると、これは失敗に終る(おわ)ほかなかったことは明らかです。実生活において、恋人という他人と近代的な個人対個人の関係をむすべなかった——というふうには推測されます——人間が、小説のなかで突如「近代化」をなしとげて問題を解くといったことはとうてい期待できないからです。

近代小説には、何人かの「個人」が登場して、たがいに関係しあいながら力学法則のようなものに従って動いていくことになっています。ここで個人といってもそれは抽象的なアトム(注5)というだけのものではありません。たとえていえば、ハードボイルドの卵みたいに、自身の部分と黄身の部分とが截然(せつぜん)と分かれていて、外側に充分厚くて強靱な社会的自我が、内側に暗黒の自我があるという二重構造をもった人間が個人なのです。大事なのは、この自身の部分が形成されていること（つまりは近代社会ができあがっていること）、その反面として暗黒部分の存在がはつきりと意識されていること、です。西欧の近代社会も個人主義も、このような個人を前提としています。日本の現代文学にはこういう意味の個人も近代社会も存在しなかったので、作家は外国の文学から学んで個人を創造するほかなかったのですが、そういう例として、堀辰雄などの名が浮(うか)びます。菜穂子や節子(注6)は日本の現代文学のなかで個人として存在した最初の女で、それだからまた小説のなかで他の人物に対して他者ともなっています。

そこではつきりしているのは、作家自身が自身と黄身の未分化状態にあるかぎり、近代小説は書かれないというのですが、しかしこれは、日本には近代社会も個人も存在しないから近代小説は書けないということではな

いのです。事実上日本は近代社会の一種であり、日本人はある層まで近代的な個人として生きていることも否定

できないことです。だがこれを認識する方法が文学の側にないかぎり、それは存在しないにひとしいのです。そして日本の現代文学が個人の存在に気づくのも、もっぱら家の崩壊（共同体の分解）といった面においてで、⁽⁴⁾ここでは個人はまだ、この崩壊がもたらした怪物としてみられているにすぎません。ところが近代小説のなかではこの怪物いや個人が動きまわっていて、もちろん動かししているのは小説家なのです。しかも、個人というものが黄身・白身の二重構造をもっているおかげで、かれらは相互に制約し依存しあいながら自由独立であり、この条件さえあたえられていれば、小説のなかのかれらはあたかもかれらだけで生きていくようにみえ、したがってここにひとつの自己完結的な世界が存在することになります。しかしくりかえしていえば、そもそも、作者自身为例の二重構造をもっていて白身のほうを剝離する操作ができなければ、あるいは白身が仮面であることを意識することができなければ、なにこともはじまらないのです。

⁽⁵⁾ 安吾がいわゆる「仮面紳士」型個人でなかったのは坂口三平代さんの『クラクラ日記』^(注7)などをみてわかることで、安吾もまた日本の文士によくある、白身を欠いた人間でした。このむき身人間は、他人とむき身を接するか、殻をかぶるか、このどちらかの型の人間関係しかもつことができません。しばしば安吾は、人間とはなんと退屈なものだろうといらだっていますが、この退屈といらだちは、みずからのかぶった殻の感覚にほかなりません。そして、人間というものがかなしかったりなつかしかったりするのには、むき身から分泌される他者へのあこがれなのです。いずれもハードボイルド卵型の人間には無縁のものだといえます。

「吹雪物語」の人物たちはいずれも安吾自身と同じ構造の人間であって、白身を欠いていることが次第にわかってきます。そうすると、安吾の観念の投影にほかならない人物が、いくつかの楽器の如くそれぞれの音を発しているにすぎないという様相を呈してきます。

人間がこれほどカクゼツしあっている小説も珍しいのですが、これはたんに白身の欠如からくる、人間関係の不成立にすぎないので、これは孤独などということばを使うことは（安吾はさかんに孤独とか孤独児といったことばを使っています）、ことばの誤用ではないかと思われるほどです。

(注) 1 ロマン——ここでは長編小説のこと。

2 講談——大衆演芸のひとつで、軍記や武勇伝などを調子をつけて語るもの。

3 ヘンリー・ミラー——アメリカの小説家(一八九一―一九八〇)。

4 矢田津世子——昭和戦前期の小説家(一九〇七―一九四四)。

5 アトム——事物を構成する最小要素。

6 菜穂子や節子——それぞれ堀辰雄の小説『菜穂子』、『風立ちぬ』の登場人物。

7 『クラクラ日記』——安吾の妻による回想記。

問

(A) 〰〰 線部(イ・ロ)を漢字に改めよ。(ただし、楷書^{かいしよ}で記すこと)

(B) 〰〰 線部(あ・う)について。本文中の意味として最も適当なものを、次のうちから一つずつ選び、それぞれ番号で答えよ。

(あ)	みいられて	1	反発しようとして	1	どうやってみても
		2	取り憑かれて	2	はたから見ても
(い)	どうてい	3	内心を暴かれて	3	本来は
		4	おだてられて	4	つまるところ
		5	凝視されて	5	無理があつて

(う) 截然と

- | | |
|---|---------|
| 1 | 対立しながら |
| 2 | 抵抗なく |
| 3 | よく観察すると |
| 4 | 安定感をもつて |
| 5 | 目に見えて |

(C) — 線部(1)について。ここには筆者のどのような考えが込められているか。その説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 小説を成り立たせる法則には、独りよがりのままでは従うことができない。
- 2 「他者」が書き手にどのように意識されるかが、小説の成否の決め手になる。
- 3 日記と小説の違いを知るためにも、「他者」をいかに描き出すかが重要である。
- 4 ことばを使うあらゆる場において、「他者」の存在を忘れることができない。
- 5 異質な存在への理解を深めることが、持続するエネルギーを小説にもたらす。

(D) — 線部(2)について。その説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 読者が、作者が築いた時空間にいるかのように自分の存在を客観化する。
- 2 読者は、作者にとって不確かで表現できない存在として自らを想像する。
- 3 読者が、作者のことばの法則を脅かし葛藤をもたらす他者の存在に勘づく。
- 4 読者は、作者に見出された奇怪な影としての他者の立場に自らがあると感じる。
- 5 読者は、作者の分身である他者に親密さを感じ自らをそれに重ねようとする。

(E) — 線部(3)について。ここで筆者は坂口安吾をどのように評価しているか。その説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 安吾はことばの技師であり、よく生きることと充実した創作が比例することに気づいていた。

- 2 安吾は講談を好むあまり、「他者」に生き生きとした姿を期待しすぎて結局裏切られた。
- 3 安吾は執筆と生きることとを切り離してしまったので、徐々に自己表現ができなくなった。
- 4 安吾は自己にこだわったため、執筆によって精神的に追い込まれることを避けようとした。
- 5 安吾は書くことをやめなかったが、生きることが小説の方法の探求よりも優先していた。

(F) 空欄 にはどのような言葉を補ったらよいか。最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 頭を使わずに、穏当な表現を選ぶ
- 2 一瞬のうちに、すべてを表現する
- 3 ことばを使わずに、観念を追求する
- 4 効率的に、周囲からの評価を得る
- 5 手数をかけずに、自己を表現する

(G) 線部(4)について。その説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 日本の小説では、共同性が解体された際に誕生する異質な存在としてようやく個人を描けた。
- 2 個人という不気味な概念を表現するには、家の崩壊という設定を用意することが必要だった。
- 3 日本社会が近代化の途上にあったため、多くの読者にとって個人は馴染みのない概念だった。
- 4 日本の小説は成立時に西欧の規範を参照していたため、個人の描写にリアリティがなかった。
- 5 共同体の崩壊をもたらす近代的な個人は、日本には実在せず得体の知れないものだった。

(H) 線部(5)について。ここで筆者は坂口安吾がどのような人物であると述べているか。句読点とも四十字以上五十字以内で記せ。

(I) 次の各項について、本文の内容と合致するものを1、合致しないものを2として、それぞれ番号で答えよ。
イ 書き手がことばを向ける他者を仮構するならば、それが日記であっても小説を書くという営みに近づいて

いくことになる。

ロ 成功している小説は、読者を自身が存在する時空間から異なる時空間へといざなってくれる。

ハ 外国文学を手本とすることによって、日本の現代文学は作中で独立した個人として存在する女性たちの姿を描くことができた。

ニ 「仮面紳士」型個人でなかった安吾は、西欧の個人主義を知っていながら適合できなかった人物なりに、近代的な他者へのあこがれを持ち続けていた。

ホ 安吾が「孤独」と書く場合は、社会から切り離された状態を指すのではなく、安吾自身の自我の問題が表されていると思った方がよい。

二 左の文章を読んで後の設問に答えよ。ただし、設問の関係で返り点、送り仮名、句読点を省いたところがある。

(解答はすべて解答用紙に書くこと)

做^{なスニ}事^ヲ非^{ザレバ}誠^ニ意^ニ則^チ凡⁽¹⁾百不^ラ成^{キモ}。如^{リテ}二^レ当^{ヤまひニ}疾^{フガ}請^ヲ医^ヲ亦^モ然^リ。
既^ニ托^{スルニ}以^{テス}死^ヲ生^ヲ。必⁽²⁾当^ニ一^ニ信^ニ其^ニ言^ニ不^ラ生^{キモ}疑^リ惑^{カクノ}。如^レ是^ニ。
則^チ我^ニ之^ニ誠^ニ意^ニ与^ニ医^ニ人^ニ感^(注1)孚^{ふシテ}為^リ一^ト而^{シテ}藥^モ亦^モ自^{おのづから}有^{ラン}。
靈^ニ矣^ニ。是^{レハ}則^チ誠^ニ之^ニ感^ニ応^ニ也^ニ。若^シ或^{イハ}弥^(注2)日^ヲ經^{レテ}久^{シキヲ}未^ダ得^ニ効^ヲ驗^{スルニモ}欲^{ハント}請^ニ他^ニ医^ヲ亦^モ当^ニ能^ク与^ニ前^ニ医^ニ謀^リ使^ム之^{ヲシテ}。
拳^{ゲテ}其^ノ所^ヲ知^ル而^{トモニ}与^ニ共^ニ虚^ニ心^ニ商^(注3)議^セ可^ク也^ニ。如^{クニシテ}是^ニ而^{シテ}無^{キハ}効^ニ則^チ命^ヲ也^ニ。非^ズ可^{キニ}疑^ス惑^{シテ}不^{シテ}然^ラ衆^ニ医^ニ群^ニ議^シ。
紛^(注4)錯^{シテ}不^レ決^セ如^{キハ}二⁽⁵⁾築^(注5)室^{シツヲ}于^ニ道^ニ則^チ竟^{つひニ}是^レ無^キ益^ニ耳^ニ。

(佐藤一斎『言志晩録』による)

(注)

- 1 感孚——真心から感じ合うこと。
- 2 弥日經久——長い時間が経過する。
- 3 商議——話し合う。
- 4 紛錯——ごたごたとこみいる。
- 5 築室于道——家を建てることについて道行く人々をつかまえては相談する。

問

(A) — 線部(1)の意味として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 くだらない仕事
- 2 多くの人の願望
- 3 あらゆる無意味な計画
- 4 すべての事柄
- 5 ありあまるほどの希望

(B) — 線部(2)を書き下し文にしたものとして最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 必ず一に其の言の生ぜざるを信ずるに当りて疑惑す。
- 2 必ず当に一に其の言を信じて疑惑を生ぜざるべし。
- 3 必ず一つに当りて其の言の疑惑を生ぜざるを信ず。
- 4 必ず当に一たび其の言を信じて生まれながら疑惑せざるべし。
- 5 必ず当に一つを信ずべくして其の言に疑惑を生ぜず。

(C) — 線部(3)の解釈として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 薬も不思議な効き目を現すだろう。
- 2 薬にも人の魂が宿ることだろう。
- 3 薬で超能力をも手に入れられるだろう。
- 4 薬の処方も自由自在に行えるだろう。
- 5 薬の選択も診断も確実になるだろう。

(D) — 線部(4)の解釈として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 患者はたくみに前の医者进行問詰め、前の医者が隠していた本当の病状を話させた上で、その内容を踏ま

えて後の医者と患者本人とで今後の治療方針を立て直すとい。

2 患者は十分に前の医者との計画を練り、後の医者がどの程度の知識を持っているかを見極めてもらった上で、後の医者との向き合い方について相談するとい。

3 患者は十分に前の医者に相談し、前の医者を知っていることを話してもらった上で、後の医者といっしょに公平に検討して治療の引き継ぎを行うようにさせたらよい。

4 患者は前の医者を入念に説得し、後の医者的心当たりを挙げてもらい、患者本人といっしょに客観的基準のもとで後の医者を選ばせるとよい。

5 患者はきちんと前の医者と話合い、患者が誤解していることがあれば教えてもらった上で、後の医者とは協力しながら今後も治療を続けてもらうよう約束したらよい。

(E) ——— 線部(5)について。著者・佐藤一斎は、現在の教科書等で用いられているのは異なる独特の訓読法を用いた。この箇所にもともと付けられた返り点と、それに基づく書き下し文は次の通りである。

如_レ築_二室_一于_レ道

室_{しつ}を道_{みち}に築_{きづ}く如_{ごと}きは

ここに表れた佐藤一斎の訓読法の特徴として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 置き字を認めない。

2 原文にない漢字を補う。

3 助詞を補わない。

4 二点から一点に返り読みする。

5 漢字の訓読みを認めない。

(F) 本文の内容と合致するものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 確実な結論を得たいならば合議制がよい。

- 2 何事も相手を信頼することが大事である。
- 3 医者は患者と一心同体の存在なので治療できない病はない。
- 4 道行く人々に聞いたほうが、よい知恵が得られるものだ。
- 5 何があっても、かかりつけの医者を変えてはならない。

三 左の文章は、『夜の寢覚』の一節で、大納言が妻（北の方）との夫婦仲に嫌気がさしている場面から始まる。

大納言は、北の方の妹（中の君）との間に隠し子があり、結婚後も中の君への思慕が尽きない。一方、北の方は、噂話を耳にして二人の仲を疑っている。これを読んで後の設問に答えよ。（解答はすべて解答用紙に書くこと）

いと世の中うとましく、あぢきなくながめ入りたるを、⁽¹⁾上は、^(注1)ただ心癖に見なしたまひて、^(注2)いみじく心やま
しかりければ、ゐざり出でて、「日に添へて、あらぬさまにおぼし移ろふ御気色こそ、ことわりぞやと思ふもの
から、見るたびに心動きはべれ。ただ心に任せて、あなたにおはしましたつきね。^(注3)一つ心に、誰もへだておぼすに、
なかなか心づきなさまさる」とのたまふを、⁽²⁾「言に出でて、などて言ひなしたまふ」と思ふがにくければ、のど
やかに後目^{しりめ}にかけて見やりたれば、ものこまやかに、⁽³⁾なつかしく愛敬づきてこそあらぬさまなれど、きよげなる
御顔の、もののいみじく心やましかるべきまみ、いと赤くうつろひたるが、つねよりも、あなきよげと見ゆるは、
さすがに目とどまりて、⁽⁴⁾「何事を、いかにのたまふともこそ、心得はべらね。誰が申し知らせたることならむ。⁽⁵⁾う
たて聞きにくきことのみ、隙なく漏り聞こゆるものかな。我がためはさはれや、人の御ためは、いとほしくもお
ぼされぬか。男の好色^(注4)は、^(注4)さも思ひ寄るべかりけることこそ、⁽⁶⁾なかなか思ひなりぬれ。聞きにくきことは、
いみじく人申すとも、よにあらじと、おぼしのどめてこそ、⁽⁷⁾見定めたまはめ」と、心恥づかしげにのたまふつれ
なさに、いとどものも言ひやらず、ほろほろと泣きたまひぬるを、「げに、いと若やかなる人の御上ならば、目
とまるまじきを、すこしすくよかに、もの遠く、^(注5)づしやかなる人の、⁽⁸⁾忍びあへず心弱げなるぞ、いかばかりおぼ
えたまふことならむ」と思ふに、いと罪得がましく、いとほしく、あはれになりて、近くさし寄りて、いとなご
やかに^(a)うち慰めたまふ気色の、なまめかしくめでたきを、「まいて、さばかりなる気色に、心を尽くしてあはれ
と見せたまふらむを、⁽⁹⁾かの君もいかに思ふらむ」とのみおぼし寄るに、^(b)つゆも慰まず、いと妬きに、涙のみ流れ
まさりて、

⁽¹⁰⁾あま衣たちわかれなむと思ふにもなに人わろく落つる涙ぞ

とのたまふけはひなど、いと由々しく、心にくきさまに、これも、なべての人には似ず、まさりたる御様なれば、いと心苦しくあはれにて、我も涙ぐまれて、「あが君や、など、かく冷めやかに、つらき御心ぞ」と、うち泣きて、

かさねじと思ひたつともあま衣この世とのみも君を頼むか

(注) 1 上——北の方。

2 心癖に——疑いの目で見える習慣で。

3 一つ心に、誰もへだておぼすに——皆が示し合わせて、私をのけ者にお思いになるので。

4 男の好色は、さと思ひ寄るべかりけることと——私も男だから、なるほどそんなふうに浮気をしてよかったのだなあと。

5 づしやか——重々しく落ち着いたさま。

問

(A) ——線部(1)について。これは誰のどのような様子を表しているか。その説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 大納言の、あじけなく物思いにふけっている様子。

2 大納言の、北の方を苦々しくにらみつけている様子。

3 大納言の、風情のない和歌を詠じるしかない様子。

4 北の方の、やるせなくて涙の止まらない様子。

5 北の方の、大納言をぼんやり見つめている様子。

(B) ——線部(2)の現代語訳として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 自分の口で、何でも良いのでご発言なさってください。

2 言葉に出して、なぜことさら言い立てなさるのか。

3 言うに事欠き、どうしてそんなひどいことをおっしゃるのか。

4 口から出まかせを言っても、何とかして取り繕い申し上げよう。

5 言い訳をして何とかごまかし申し上げることができらうか、いやできない。

(C) ——— 線部(3)の解釈として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 北の方にはかつてのような愛らしい様子は見る影もないが

2 北の方のかつての可愛いらしい様子がしみじみと思い出されるものの

3 北の方の大人びた美しさはこの世のものとは思えないほどであるが

4 北の方には親しみやすく魅力的であるといった様子こそないものの

5 北の方にもせめて愛しく感じさせる様子さえあれば良いのだが

(D) ——— 線部(4)について、なぜそうなったのか。その説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 大納言は浮気を指摘されてたじろいだが、うろたえる北の方を見ていたら心が落ち着いてきたから。

2 大納言は北の方に遠慮して非難を避けていたが、美貌を笠に着てわめく北の方にうんざりしたから。

3 大納言は北の方に後ろめたさを感じていたが、実は北の方も浮気をしていたことに気がついたから。

4 大納言は北の方に愛想を尽かしていたが、別れるほどでもないので何とか機嫌を取ろうとしたから。

5 大納言は北の方に不満を抱いていたが、怒って興奮した北の方の姿がいつもより美しく見えたから。

(E) ——— 線部(5)の意味として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 気味悪く

2 不愉快に

3 しきりに

- 4 何となく
5 ますます

(F) ——— 線部(6)の意味として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 しだいに
2 はつきり
3 ずいぶん
4 めったに
5 かえって

(G) ——— 線部(7)の説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 北の方を辱める大納言の発言からはもはや愛を感じられないということ。
2 北の方のきまりが悪くなるほど大納言が平静さを保っているということ。
3 少し照れつつ浮気の言い訳をしている大納言がみつともないということ。
4 大納言が悪びれることなく中の君との浮気を正当化しているということ。
5 大納言の対応があまりに冷淡で北の方の悲壮感が増しているということ。

(H) ——— 線部(8)の理由として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 普段の様子と違って北の方が堪えきれず気弱になっているのは、よほどのことだと感じたから。
2 若い頃とは異なり健康不安のある北の方が、病弱さを盾にして泣きながら情に訴えてきたから。
3 北の方が浮気を非難すればするほど愛情が失せて、ますます中の君への思慕が募ってきたから。
4 北の方を泣かせたことで、妹である中の君からも悪い印象を持たれてしまうことを恐れたから。
5 噂を真に受けて騒ぐ北の方にうんざりしつつも、出家しようとしていると気づいて焦ったから。

(I) ~~~~~ 線部(a)～(c)について。文法的説明として最も適当なものを、次のうちから一つずつ選び、それぞれ番

号で答えよ。ただし、同じ番号を何度用いてもよい。

1 完了の助動詞「ぬ」の連用形

2 断定の助動詞「なり」の連用形

3 格助詞

4 接続助詞

5 形容動詞の活用語尾

6 ナ行変格活用動詞の一部

7 副詞の一部

(J)

——線部(9)の解釈として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 中の君も姉である私のことを何だと思っているのだろうか。

2 中の君も姉である私の幸せをどれだけ気にかけているだろうか。

3 中の君も大納言のことをどれほど愛しているのだろうか。

4 大納言も私たち姉妹のことを本当はどう思っているのだろうか。

5 大納言も中の君をどの程度愛しているのだろうか。

(K)

——線部(10)の和歌の説明として適当でないものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 「たちわかれ」では、大納言との関係を断つ意味と僧衣を切り刻む意味を掛けている。

2 「なむ」は、完了の助動詞に意志の助動詞が接続して「くしてしまおう」の意を表している。

3 「人わろく」は、「外聞が悪い」の意で、感情があふれてしまう自身のみっともなさを表している。

4 「落つる」は、タ行上二段活用動詞「落つ」の連体形で、「涙」を修飾している。

5 北の方は、出家すら考えているにもかかわらず、大納言への思いも捨てきれない葛藤を詠じている。

(L)

——線部(11)の現代語訳を五字以内で記せ。ただし、句読点は含まない。

(M) 次の各項について、本文の内容と合致するものを1、合致しないものを2として、それぞれ番号で答えよ。

イ 大納言が中の君を慕う姿を見ているくらいなら、中の君のもとに行ってほしいと北の方は訴えた。

ロ 大納言は、北の方の容姿を観察する余裕すらあったものの、ついには気の毒になつて泣き出した。

ハ 大納言は、中の君と浮気していることを北の方に對して最後まで認めようとはしなかった。

ニ 北の方は日ごろから大納言への愛情を隠していなかったが、それが逆に大納言には負担であった。

ホ 大納言は、北の方が自分を深く愛していることを知つて、彼女とともに出家することを決意した。

【以下余白】